

平成16年度研究協力業務実施報告書

全国内水面漁業協同組合連合会

平成 16 年度研究協力業務実施報告書

研究協力業務は、独立行政法人水産総合研究センターが自然環境に配慮した水産業の振興を図るために湯の湖・湯川において行う試験研究を推進するために実施する事業である。本年度も、中央水産研究所内水面研究部の指導のもと、関係各位の協力を得て下記業務を実施した。

1 調査業務

魚類資源動態調査

内水面冷水域における遊漁資源管理技術の開発に資する知見を得るため、湯の湖・湯川において釣魚者へのアンケート調査（湯の湖 977 枚・湯川 1,130 枚、計 2,107 枚の回答）を行い、放流及び天然魚類資源の動態や釣魚の実態の把握に努めた。その回収率はアンケート調査を実施した 3 年前の 7% から、9%、14% と向上し、今年度は 17%（湯の湖・舟 11%、湯の湖・岸 12%、湯川 26%）となった。

2 環境保全業務

(1) 釣り場管理事業の実施により発生するゴミ類の不法投棄防止及び除去

釣魚者に対して、不用となった釣糸・釣針などの釣り具等の遺棄について、注意を喚起した。

シーズン終了後の 10 月 2 日には、湯川の釣り人による清掃奉仕「サンクス湯川・リバークリーン」を主催し、20 人の参加を得て、川岸や遊歩道沿いのゴミ、木の枝に絡まったルアー等放置釣具の除去を行った。

また、湯川においては釣り人の増加する土・日に、監視業務のかたわら、遊歩道や川辺に散乱するゴミや放置釣具等の清掃を行った。これにより、近年川辺のゴミが少なくなったとの評価を得ている。

(2) 湿原立入禁止区域への進入防止の啓発

釣魚者に対して配布するパンフレットに「釣魚心得」の重要事項として、進入防止を記載するとともに、釣魚券発売所において掲示する等、啓発に努めた。

また、湯川エリア内に設置している表示板でも表した。

(3) 水域環境の監視

湯の湖における釣魚者に対して、撒き餌・寄せ餌・生き餌の投棄の禁止を呼びかける

と共に、常に流域の水環境に注意し、異常時には研究所への連絡や関係各署への通報など監視を行った。

(4) 水質調査

中央水産研究所内水面研究部及び栃木県等が定期的に行っている湯の湖の水質調査に協力した。

(5) コカナダモの除去活動等への協力

湯の湖全域に勢力範囲を広げ、ボートの乗り入れや釣りの障害となるばかりか、景観を阻害したり腐敗し悪臭を放ったりと水環境への影響も懸念されている、外来種コカナダモの除去活動（地元自治会や奥日光清流清湖保全協議会主催）に積極的に参加した。

3 危険防止対策

(1) 水難事故防止対策

日光警察署等の協力・指導のもとに、釣り場における水難事故には常に留意し、監視体制を強化した。

(2) 犯罪、違法行為防止対策

5月1日の解禁日には多数の釣り人が湯の湖・湯川の釣り場に来場するため、釣り人間のトラブルや車上荒らし、また立入禁止区域への進入等の発生が予想されたため、日光警察署に防犯パトロール等、特段の協力を要請した。その他、不測の事態の発生に備え、警備会社に周辺のパトロールを委託した。

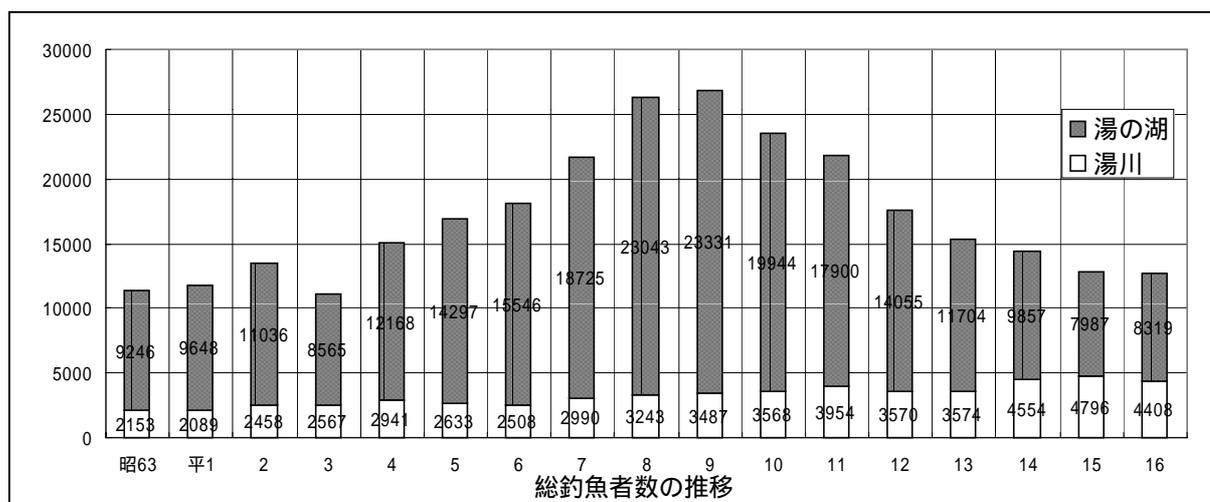
(3) 駐車違反对策

釣魚者の違法駐車防止対策として、カラーコーン（本会と日光警察署の連名入り）を要所に敷設するとともに、釣り場監視員が巡回し、注意勧告を行った。特に、解禁日の交通渋滞等に対応するため、解禁日前夜から当日にかけて、警察官の指導の基に、重点箇所に臨時交通整理員を配置した。

4 釣り場管理事業

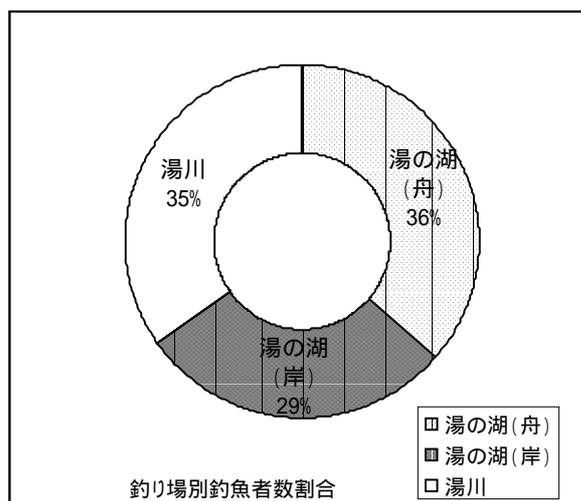
(1) 総釣魚者数

近年、内水面における遊漁者数は全国的に減少傾向を示しているが、当釣り場においてもその傾向にあり、平成9年度をピーク(26,818人)に、利用者は年々減少している。総数では、12,727人の利用となっており、本年度は前年(12,783人)と比較して56人の減少(1%減)となった。



(2) 釣り場別釣魚者数

釣り場別釣魚者数は、湯の湖は8,319人(前年7,987人)で、総釣魚者数の65%(前年62%)を占めた。湯の湖は、舟釣りと岸釣りに区分されるが、舟釣りは4,636人(前年4,919人)で前年比6%減で、全体の36%(前年38%)を占め、岸釣りは3,683人(前年3,068人)で29%(前年24%)であった。今年度は岸の釣魚者数が前年比120%と増加が目立った。

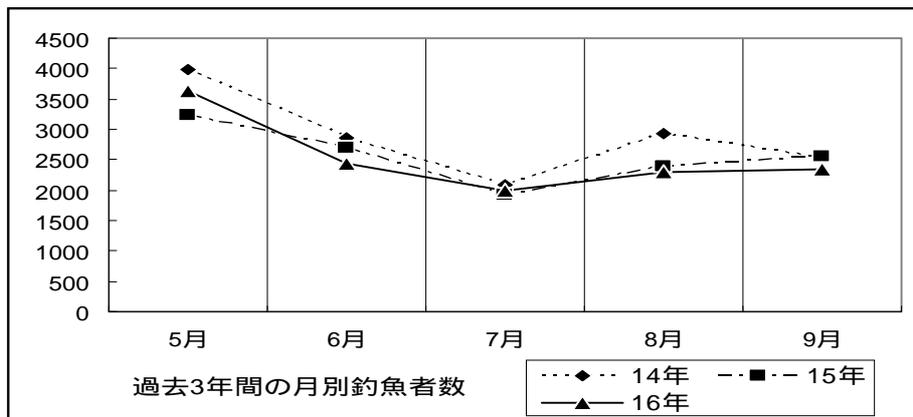


一方、湯川における利用者数は4,408人(前年4,796人)で、総釣魚者数の35%(前年38%)を占め、総釣魚者数はここ数年増加傾向を示していたが、今年度は前年比8%の減少となった。

(3) 月別釣魚者数

各月の釣魚者数の変動を割合で比較すると、例年の傾向どおり、5月の利用者が最も

多く、3,644人とシーズン全体の29%(昨年25%)を占めた。続く6月は2,445人で19%(昨年21%)、7月は1,991人で16%(昨年15%)、8月は2,307人で18%(昨年19%)、9月は2,340人と全体の18%(昨年20%)を占めて終了した。

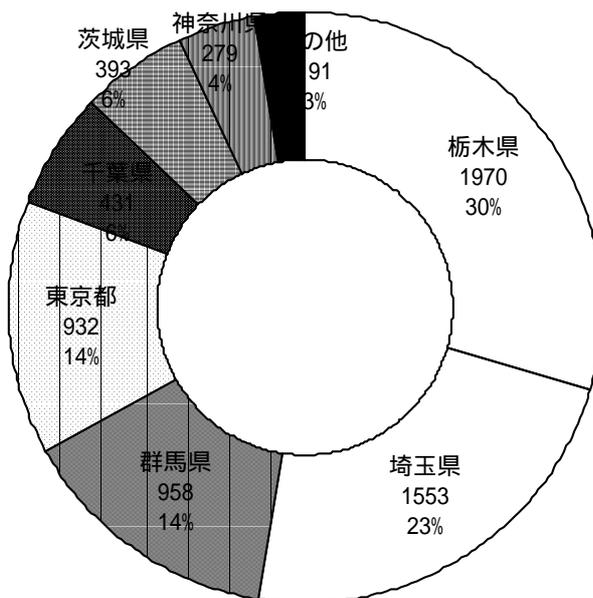


(4) 釣りカードによる釣魚者組成

本会では、釣魚者の実態を把握するため、毎年釣魚者に対し住所、氏名、釣り方等記載する簡単なアンケート形式の釣りカードの記入を要請し、その結果をとりまとめた。本年度は6,707枚(前年9,418枚)を回収した。

1) 都県別組成

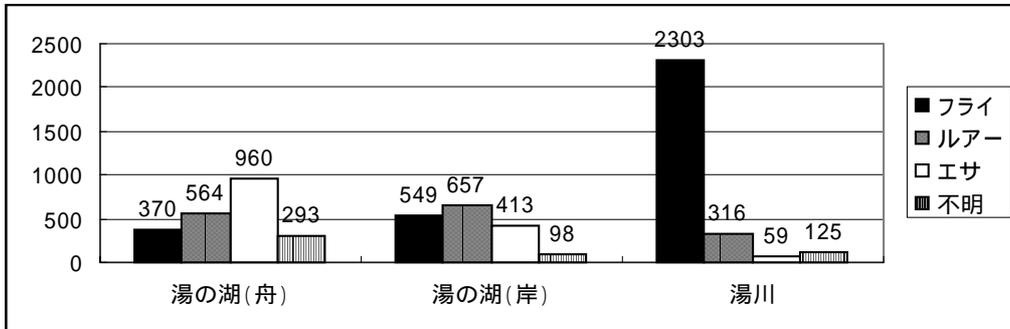
湯の湖・湯川を利用した釣魚者数の都県別組成は、栃木県30%(前年29%)、埼玉県23%(23%)、群馬県14%(15%)、東京都13%(15%)、千葉県6%(5%)、茨城県6%(8%)、神奈川県4%(前年はその他の項目に入れていたため不明)その他3%(4%)の順であった。



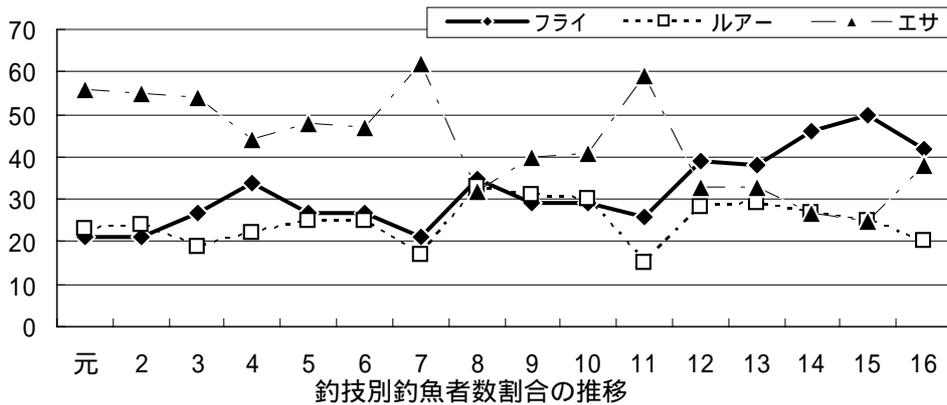
都県別釣魚者数割合

2) 釣り方別組成

湯の湖・湯川全体での釣り方別釣魚者組成は、フライ 39% (前年 47%)、餌釣り 36% (前年 23%)、ルアー 19% (前年 23%)、不明 6% (前年 7%) の順となった。かつては餌釣り、ここ数年はフライ・ルアーが主体となる傾向となっていたが、湯の湖全体の主体が餌釣りのためその傾向が全体の数字に影響していると思われる。



この組成を釣り場別にみると、湯の湖における舟釣りでは、フライ釣り・ルアー釣り・餌釣りの比率(不明を除く)がそれぞれ 19 : 30 : 51 (前年 17 : 21 : 51) であり、湯の湖の岸釣りでは、34 : 41 : 25 (前年 32 : 40 : 28) である。一方、例年フライの割合が圧倒的に高い湯川においてはこの比率が 87 : 12 : 1 (前年 86 : 12 : 2) を示している。



(5) 成魚放流(湯の湖)

湯の湖へはニジマスとカワマスを放流した。本年度の成魚放流実績を表に示す。

湯の湖へニジマス 4,700 k g (前年 4,858 k g)、カワマス 1,179 k g (前年 933 k g) の放流を行った。放流は、原則として週 2 回とし、状況に応じ多少増減させた。更に、放流当日の天候、休祝祭日等を考慮し、放流時刻、放流場所等、適宜変更して実施した。

湯川へは放流を行わなかった(前年カワマス 164 k g)。

	ニジマス		カワマス		計
	小型	大型	小型	大型	
湯の湖	3.220kg	1,480kg	1.138kg	41kg	5,879kg
	18.461 尾	2.265 尾	17.660 尾	121 尾	38.507 尾

(6) 稚魚放流(湯の湖)

湯の湖における稚魚放流実績を表に示した。ヒメマス 40,000 尾(前年 30,000 尾)、ホンマス 20,000 尾(前年 20,000 尾)、カワマスを 30,000 尾(前年 30,000 尾)放流した。

放流月	放流魚種	尾数
5月19日	ヒメマス	20,000
	ホンマス	20,000
8月15日	カワマス	29,000
8月29日	カワマス	1,000
10月1日	ヒメマス	20,000

(7) その他

1) 中央水産研究所内水面研究部が行う普及啓蒙活動への協力

中央水産研究所内水面研究部が主に青少年を対象に実施している採卵体験や放流体験などの各種体験学習への協力や、同部が毎年実施している一般公開への積極的な対応を行い、内水面漁業への理解や知識の普及に努めてきた。

2) 湯川倶楽部の活動

湯川の環境保全に関心を持っている人で、清掃活動やシンポジウムなどに参加する意思のある人をメンバーとする釣り人の会で結成 3 年目になる。本年度は、湯清掃奉仕「サンクス湯川・リバークリーン」のほかに、「澄んだ空気の中で自然繁殖が多くなった湯川でカワマスの産卵行動を観察しよう」と、11月13日に「カワマスウォッチング in 湯川」を実施し、湯川倶楽部会員の他、湯川を愛する釣り人など 20 名のご参加を得、カワマスのペアリング行動を観察した。

また、リバーウォッチング終了後は「湯川釣魚実態調査結果」の報告や「渓流魚の生態と保護増殖」と題する講演と意見交換会を開催した。

3) ホームページの活用

全国内水面漁連のホームページに「奥日光トラウトフィッシング 湯の湖・湯川」の項を設け、解禁情報やイベント情報等の発信を続けている。